

# 成果報告書

記入日 2021 年 4 月 21 日

|   |                       |                    |
|---|-----------------------|--------------------|
| 氏名 山本 尋   | 渡航先国名・地域名<br>ボリビア多民族国 | 所属機関<br>サン・アンドレス大学 |
| ボリビアにおけるティンクをめぐる異議申し立て運動：頑迷の中の「文化の政治性」  |                       |                    |
| 研究期間 : 2019 年 2 月 ~ 2020 年 10 月   |                       |                    |
| <p>研究成果（概要）</p> <p>祭礼ティンクの無形文化遺産登録を通じて、ボリビアにおける土着性の高い先住民文化の復権のひとつの形が示された。一方でこの運動は、国の与党、社会主義運動党(MAS)の政治運動に横滑りし、国内の政治的な左右対立もまた放置されている。そこにボリビア社会における多様性と分断の併存がみられる。</p>  |                       |                    |
| <p>研究成果（詳細）</p> <p>本研究は南米ボリビアの「ティンク」を対象とする。ティンクとは、同国アンデス地域に位置するポトシ県北部を中心に見られる土着的な祭礼であるが、1980年代から「フォークロア舞踊」として再解釈的に創作されて以来、都市の祭典を賑わしている。一方で2000年代から、ティンクを祭礼として担う農村部の先住民の側から、彼ら自身の文化的権利を要求する動きも見られてきた。こうした運動を表現するのに「異議申し立て(reivindicación)」などの言葉が当てられるが、現場における文化の担い手の自意識とは裏腹に、その過程や帰結は顕著な逆説性をはらんでいる。今回の現地滞在は、そのような実態を明らかにする中で、ティンクの再解釈や文化運動に何がなし得て、また何がなし得ないのか、意義と限界を考察する本研究の方向性が決定された。</p> <p>事例研究を進める中で、筆者はティンクの異議申し立て（およびその逆説性）に大きな三つの流れを見ている。一つ目は、ティンクが上述のフォークロア舞踊として国民的な場面に進出する過程で、乗り越えられつつあった社会的断絶が再生産される帰結である。二つ目は、そのようにして出来上がった「国民」文化に挑戦する、ポトシ県サン・ペドロ・デ・マチャ村の人々の文化運動（「ティンクの中心地」運動）である。そして三つ目が、社会主義運動党(MAS)をとりまく政治運動に収斂する「ティンクの中心地」運動の今日の姿である。以上を読み解く事で、いわゆる「文化の政治性」をとりまく現象をその広がりから理解する事が、報告者の研究の狙いである。ゆえに本研究の視点は都市と農村をまたぐ。</p> <p><b>1) 事例研究の成果報告</b></p> <p>フォークロア舞踊はボリビアにおいて生活の折に触れて親しまれている。とりわけ農民の生活慣習を表象する演目は、軍政期（1960年代～1980年代初頭）において、民主主義を擁護する学生の対抗文化の中で数多く創作された。本邦においてもこの側面を評価する研究があり、文化やエスニシティの多様性に立脚した今日の国民像が早くも体现されていたとされている。報告者の研究はティンクを題材に、</p> |                       |                    |

フォークロアに支えられたナショナリズムが辿ったその後を注視するが、このような見解にあくまで慎重な立場にある。以下よりこの見解に至った経緯を説明する。

ティンクは 1980 年代初頭にフォークロア舞踊として登場する。土着の祭礼ティンクで見られる先住民の儀礼的な拳闘を模した振り付けを持ち、行政上の首都ラパス市で 1988 年から開催される「大学フォークロア祭典(Entrada Folklórica Universitaria)」に進出した事で国民的な普及に至った経緯を持つ(写真①)。この祭典のティンク舞踊団の創始メンバーの一人は、「白人系の容貌を備えた大学生の自分たちが民族衣装を着て踊った事で、農民や先住民への社会的偏見が払拭された」との主張を報告者に語る。しかしこの言説が、先住民を劣位に置いたボリビア旧来の社会規範をなぞっていることは明白である。

そのような中、フォークロア舞踊のティンクが、いわゆる国民文化としてナショナリズムの感情を掻き立てる現実もある。2011 年、ティンクがその人気ゆえに国境を接する諸外国に「盗用」されている事態を糾弾する国民規模のキャンペーンが「ボリビア・フォークロア防衛推進組織(OBDEF0)」によって企画され、実行された。ところが OBDEF0 はこの時ティンクが「祭礼」ではなく「フォークロア舞踊」を指すことを自明視して宣伝を行っており、この状況が「文化の盗用」として、北ポトシ・アイリュ農民先住民組合(FS)にさらに糾弾された。

FS は報告者が留学中に接触した、土着のティンクを担う人びとが属する草の根組織であり、本研究ではこの組織が担った「ティンクの中心地」運動に一定の評価が下される。なぜなら、この文化運動によってマチャ村の祭礼ティンクが国の無形文化遺産に登録され(2012 年)、国民国家という空間において文化を表象する側と表象される側の人々の間にある時空間の断絶、特にこの前者の人々の優位という権力関係が乗り越えられたからである。

## 2) モラレス政権の延命と「ティンクの中心地」運動

上述のような意味を持った「ティンクの中心地」運動が展開したのは、エボ・モラレス政権期(2006 年~2019 年)に一致する。FS もまたモラレスが党首を務めた MAS の支持基盤であり、両者はこの長期政権のなかで利害一致を深めていく。マチャ村が正式な地方自治体とされる過程がその主な事例であり、同村が「ティンクの中心地」であることが政治的スローガンとして共有された。マチャ村は、70 年以上前から国に行政上の自治権を訴えて来ており、モラレス大統領の後押しを得た事で 2019 年 6 月 23 日、自治体の成立が認可された。この時、ボリビアは総選挙を 4 か月後に控えていたため、「マチャ自治体」成立運動はそのままモラレス 4 選を目標とした支援者運動の様相を呈した。上述の日付に村を訪れたモラレスは、壇上から「われわれにはティンクがある。ただし相手は右派だ」と支援者にユーモアで発破をかけた。この比喻は、土着ティンクにおいて、対立する先住民の大集団が二手に分かれて殴り合う慣習に因んでいる。

10 月モラレスは当選するも、翌月に米州機構から得票操作を指摘され、反対派のデモが激化する中で退陣する。従来 1 期を限度としていた大統領の任期が、モラレス在任中になし崩し的に 3 期まで延ばされた事が、都市部における不満の下地になっていた。国内の最下層を含むアンデス先住民を主要な支持基盤とするがゆえに既成の権力の打破をモットーとした MAS をして、自政権が延命される中で一定の権力性を帯びてしまった側面がある。本研究は文化運動を対象としながら、MAS のこの逆説性をも明らかにした。

以上に見た「ティンク」の異議申し立ては、「文化の政治性」の観点において、次の三つの相を持つ。

①国民文化の表象における政治性、②その権威を乗り越えるアイデンティティの政治、③政党政治（選挙政治）への横滑りである。これらを判読可能なものにする事で、従来の研究では曖昧に扱われてきたいわゆる「文化の政治性」の意味範囲が切り分けられる。特に「③」は文化運動と地方政治をローカルな人々が意図的に同一視する動きであり、文化と地方政治の「結びつき」のみに言及する先行研究のさらに先を行く状況であり、報告者の現地調査を通じて、「文化の政治性」に関する最新のフェーズが捉えられた。

2019年のモラレス政権失脚という事態は、調査対象のマイノリティを権力に対置し、寄り添おうとしてきた文化人類学の立場をも相対化しかねない。本研究の大きな問いとして「文化運動に何がなし得て、何がなし得ないか」の慎重な検討を挙げたが、これによって「権力 vs 反権力」という単純な図式が通用しがなくなった今日の社会的分断について、一定の立場を示す事が模索される。その一環として、単に文化やエスニシティの多元性に立脚した国家づくりを推し進めたモラレス政権の民主主義に期待を託す形で終わられている先行研究の批判的検討が必要である。

### 3) 今後のさらなる見通し

今日の文化人類学において再び光が当たりつつある事象として、自然災害や疫病が挙げられるが、2020年からの新型コロナウイルス流行により、本研究でもこの観点を重要視せざるを得ない事態となってきた。自然災害と先住民の周縁性との関わりを考察する上では、1982年から1983年にかけてアンデス地域を襲った干ばつも思い出される。先述のティンクのフォークロア化（1980年代前半～）を正当化したのは、ポトシ地方先住民への否定的イメージの払拭という大義名分であったが、この否定的イメージとは、作物不足によって農村から都市への流出を余儀なくされ、物乞いとなった彼らの姿である。今後は、従来の研究において周辺的とされてきた自然現象という要因を、政治と同様に、文化と抜き差しならぬ関係性の上で把握しなければならない。

この意味において、コロナウイルス流行による申請者の帰国後に起こった、マチャ村におけるティンクの強硬開催は非常に意味深い。ボリビアでは2020年3月以降、コロナウイルスが広まりはじめ、当時のアニェス右派暫定政権（モラレスの後任：2019年11月～2020年10月）が厳格な外出禁止令を敷いて、事態の打破を試みていた。国内の第一次産業従事層がこのしわ寄せを受ける中、マチャ村の人々はティンク強硬開催について、「アニェスがわれわれを飢え死にさせようとしているからだ」という明白に政治的な動機を口にしていたという。同年10月、アルセ大統領の就任により、MASが選挙によって与党に返り咲くが、今後のフィールドにおける文化政治の動向が引き続き注視される。



写真①「大学フォークロア祭典」での舞踊ティンク

## 留学中の生活・研究でのトピックス

マチャ村のティンクは、毎年5月初旬の「十字架祭り」の一環として開催される。報告者は2019年、村内に60以上点在する先住民村落のうちひとつであるプカマユ集落に声をかけられ、祭りの準備から終わりまでの一部始終を成員と共に過ごした(写真②)。その間参加者から『ティンクの中心地』といえ、マチャ新自治体の創立だ」という意味深な台詞を聞き取ったことが、文化が政治運動に横滑りするという先述の見解の発端である。先住民組合を基盤とする政党であるMASに彼らが希望を託していたことは想像に難くない。



モラレスが退陣を迫られた同年11月、報告者は、政権に対する抗議運動が最も激しかったラパス市にいた。政権をなし崩し的に長引かせた「独裁者」の敗退に、三色の国旗を手に歓喜する群集を見て、多種多様な成員を一つの国家に抱えるボリビアゆえの、社会的な合意形成の難しさが感じられた。報告者の滞在はさらにコロナ禍突入(2020年3月～)まで続いたが、上述の実感、国内の貧富の差が顕在化したこの局面においてもやはり強められた。

報告者のこれからの問題意識は、いわば「頑迷」としての多様性である。2009年、国の正式名称を独立以来の「共和国」から「多民族国」に改めたボリビアをして、直近において目立つのは、支持層の同質性を引き合いに、自政党(=祖国)の正当性が主張される傾向である。その傾向はMASとて例外ではない。留学開始の際、報告者は「目指す研究者像」について「分断される人々を繋ぎ、社会の安寧に資する文化人類学者」と書いたが、その理想が軽はずみとすら言えかねないことを、現地滞在の1年半を通じて肌で感じた。とはいえ、存在する分断を次々と可視化していくことは、その逆に走るより建設的であり、また避けられないように思われる。

## 今後の社会貢献

コロナウィルス流行により本来の留学期間を全うできなかったことは、報告者の心残りである。一方で報告者は現在、大学で非常勤の教鞭を執っている。スペイン語とラテンアメリカ地域研究の入門的な科目を複数担当し、その内容の性質上、ここでの留学経験が結果的に不可欠なものとなっている。

報告者は授業において、地域研究では、異なる文化や社会に目を開き、自分たちが属するそれらと比較する視点が不可欠であると受講者に説明した。この比較とは、現地社会を包む葛藤や難問を前に、「同じ状況が日本に無くて良かった」と安心を得るためではなく、そこから一歩進んで、「同じような状況が、いかなる意味においても自分たちが属する社会に無いだろうか」と自問する姿勢を獲得するためのものである。いわく「民主主義」や「文化」は、所与のものではなく、言論や運動によって絶えず維持され、更新されるものであるなど、社会に流布されるべき認識は数多い。

以上、調査者としての自分の経験を、研究者と教育者というさらに二つの立場から、ラテンアメリカの現地社会のみならず、日本社会に還元していくことが、報告者の今後なしうる社会貢献である。